

やさしい嘘

—Dear Evan Hansen の嘘に対する観客反応—

住田 光子*

(令和4年10月28日受付)

Gentle Lies : Audience Response to a Lie in *Dear Evan Hansen*

Mitsuko SUMIDA

(Received Oct. 28, 2022)

Abstract

Lies may be deemed as undesirable in any complex situation. Thus, theatre audiences may not be able to understand the act of lying in a drama. The Broadway musical drama, *Dear Evan Hansen* (2016) is themed on a small lie that leads to lies that are unfortunately published on social media. This paper aims to examine the audience reception of *Dear Evan Hansen* by gauging their responses to the lie told by the teenager, Evan Hansen in the film version (2021). Initially, we examine differences between the stage and the film version, indicating certain contradictions in the film's mise-en-scène based on the director's interpretation of Evan as 'a very lonely sympathetic kid'. Subsequently, we scrutinise the voices of university students majoring in technology and engineering to discuss whether the film's audiences empathetically interpret Evan's lie despite such contradictions.

Key Words: Response to a Lie, Musical, Audience Reception, Theatre Education for Engineers, Minority with Social Anxiety Disorder

はじめに

総務省の「平成27年版情報通信白書」によると¹、20代以下で、SNS上のトラブルの経験があるひとは26%である。その年代の約四分の一を占める。トラブル経験の内容としては、7.4%と最も多いのが「自分の発言が自分の意図とは異なる意味で他人に受け取られてしまった(誤解)」であり、2~4位は各4%程度を占める。上位のうち3つのケースのトラブル(1, 2, 4位)に共通しているのは、本人の意図とは異なってSNSの内容が解釈(誤解)される点である。例えば、4位には「自分の意思とは関係なく、自分について(個人情報、写真など)他人に公開され

てしまった(暴露)」という内容がある。このトラブルでは、情報を有する本人の意図しないところで、その情報が拡散(ツイート)され、本人がとめられない状態へと情報が急速にひとり歩きするところが問題となる。2022年7月9日の日本経済新聞では「『凶行』拡散 瞬時に—SNSに大量の現場映像」という記事において、事件が起きた時、現場の写真や映像付きのSNS投稿がなされ、その日に大量にリツイート(拡散)されたことが話題となった²。記事では「人は不安になるほど伝えたい思いが先行し『いいね』や拡散をしやすい」と情報拡散の速さや、そこに潜む危険性に対して警鐘を鳴らしていた。

本稿で取り上げる『ディア・エヴァン・ハンセン』(*Dear*

* 広島工業大学情報学部情報コミュニケーション学科

Evan Hansen) は、障害のあるティーンエイジャー、エヴァン・ハンセン (Evan Hansen) の嘘にまつわる演劇 (ミュージカル) である。エヴァンが真実を明かさないうことから、ひとつの嘘が様々な嘘につながる。本人の意思をよそに、嘘を振り所にした情報がソーシャルメディア上で拡散される。その結果、果樹園再生のクラウドファンディングは成功を迎える。けれども、エヴァンは、嘘の責任を取ることになる。そうして、以前は日陰に逃げていた青年が日向へ踏み出し、前へ進み始める物語である。

この劇は、2016年10月から2017年上演のブロードウェイ・ミュージカルであり³、音楽と歌、台詞、ダンスからなる大衆演劇である。その売りは、ベン・プラット (Ben Platt) という俳優のスター性もさることながら、親しみやすい旋律と大衆に訴えかける歌である。特に、本演劇では、複数の映像を舞台上に配置し、サイバースペースを演出することで、インターネット上で起きていること、目に見えないひととひとのつながりを見えるようにした演出が独創的であった⁴。

劇の映画化である『ディア・エヴァン・ハンセン』(2021) は⁵、“coming-of-age story (成人することの物語)” という演劇の要素を取り入れた「ミュージカル映画」である⁶。演劇のアダプテーション (翻案) である映画では、歌を通して、未曾有のコロナ禍において、悩んでいるあなたはひとりではないというメッセージを若者に向けて発するつくりとなっている。そうしたシンプルな主題は共感を得やすい。しかしながら、その一方で、映画は、青年の嘘を肯定的に捉えるかに見え、その作品構造としてどこか性急な部分がある。例えば、ソーシャルメディアで若者がリツイートするが、そのひとつひとつがつながり無数に広がっていく映像が展開する。ある青年の話した内容は真実ではないが、青年の行為やそこにある勇気を称賛するようなポジティブな反応 (リツイート) が歌 (音楽) として流れるのである。そうした部分は、一部の観客がこの映画を受容しにくい理由のひとつにもなっている。

演劇が多くの賞に輝き評価されたのとは対照的に、映画版に対しては否定的な評価も少なくない。つまり、映画にはリアリズムが欠けていて、エヴァンのように鬱病や社交不安障害を抱えるひとの現実が十分に掘り下げられていないとする批判がある (Auvil)⁷。そうした部分では、ポップカルチャーとしてのエンターテインメント性の強いミュージカル演劇と、時に写実性が高く評価される映画における表現スケールの違いが顕著に表れており、それは「嘘」を安易に捉えるこの映画視点を受け入れられないひとびとがいる理由でもある。

本稿では、嘘に対する観客反応を手掛かりに『ディア・エヴァン・ハンセン』の作品受容を再考する。外国語の授

業のなかで、本作品の映画に触れた学生を、ここでは観客として捉えることにする。まず始めに、(1) 俳優や映画監督のインタビュー映像や上演スクリプトを通して、舞台作品を映画化する難しさを考え、演劇と映画の物語上の差異を考察する。そうした差異によって、映画ではどのような物語上のほころびが生じるのかを示す。そのうえで、(2) こうしたミザンセーンにおいて、青年のついた嘘のどの部分が観客には受け入れがたいのか、それとも共感理解できる部分なのか、映画の「嘘」の演出と観客 (大学生) の反応を考察する。筆者は、エヴァンのついた嘘を共感理解できない観客が多いのではないかとという仮説を立てているが、もし仮説と異なる反応が見られるならば、それはどのような考えに基づくのだろうか。観客側の多様性を考察する。*Dear Evan Hansen* は、ブロードウェイ・ミュージカルのなかでも、障害のあるマイノリティに焦点をあてる数少ない作品のひとつである。観客の映画受容をひとつの手掛かりに『ディア・エヴァン・ハンセン』を捉え直したい。

1. 手紙から始まる物語

本章では、物語を知らないひとのためにあらすじを説明しておきたい。

【作品紹介】 *Dear Evan Hansen*

原作はヴァル・エミツヒ (Val Emmich 1970-) の小説⁸。演劇 (2016年 ブロードウェイ初演) はスティーヴン・レヴェンソン (Steven Levenson) の脚色、ベンジ・パセック (Benj Pasek) とジャスティン・ポール (Justin Paul) の作詞・作曲による⁹。映画 (2021) では、脚本はレヴェンソン、監督は小説『ウォールフラワー』(2012) を書いた作家スティーヴン・チョボスキー (Stephen Chbosky) による。主演 (エヴァン役) は、演劇 (ミュージカル)、映画ともにベン・プラット。物語のなかで主人公が患っている「社交不安障害 (Social Anxiety Disorder)」とは、ひととの関わりにおいて緊張や不安などの感情を抱く種類の障害である。症状として発汗、震え、赤面、嘔吐などがある。恐怖や不安な感覚、他人からの批判を避けるためにひととの関わりから遠ざかるようになる傾向がある。ベン・プラットが内向的な青年エヴァンを熱演した。今なお世界中の若者に愛されている彼のあたり役である¹⁰。

【映画のあらすじ】

これは、若者と小さな嘘についての物語である。「親愛なるエヴァン・ハンセン」というタイトルは、手紙の書きだしである。本来は、読まれることがなかったはずの手紙である。主人公のエヴァン・ハンセン (Evan Hansen) は、高校で呼び出され、自死した同級生 (コナー・マーフィー Connor Murphy) の両親と面会する。死んだコナーには1通の手紙が残っていた。文面から察するに、コ

ナーがエヴァンにあてたものようである。「親愛なるエヴァン・ハンセン」と始まる。実は、その手紙は、社交不安障害と鬱病に苦しむエヴァンにとって、セラピストから課された課題であった。自分あてに手紙を書き思いを表現することで心を落ち着けるというものであった。面会の前日、エヴァンが図書室でタイプしたものを印刷しようとしていたところ、コナーが強引に取り上げ返してくれなかった。エヴァンは、息子を失い悲しみに暮れる母親の思いを知り、ふたりは親友では、と想像する彼女に「僕が書いたものだ」と言えないまま面会はおわった。

月日が経ち、エヴァンと、コナーの両親（ラリーとシンシア Larry & Cynthia）や妹ゾーイ（Zoe）との親交が深まっていた。コナーの追悼集会を機に、彼が愛したりんご果樹園を再生させるという「コナー・プロジェクト」が立ち上がっていた。学校では女子学生アラナ（Alana）が中心となり、男子学生ジャレッド（Jared）も手伝い、コナーのことがひとびとに忘れられないようにとの思いから活動が進められていた。成績優秀でリーダーシップのあるアラナは、学校ではエヴァンと同じように鬱を隠している学生のひとりである。クラウドファンディングが実現すれば、コナーの思い出の場所であり、地域のひとの憩いの場となるりんご果樹園が再園されることになる。エヴァンが果樹園で木から落ちて腕を骨折した時、コナーがそばにいてくれたという心あたまるエピソードが明かされていた。そのようななか、アラナは、エヴァンとコナーの関係を不審に思う。彼女は、ソーシャルメディア上でコミュニティから寄せられた声にすべて答えることが誠実であると考えているが、情報を集約するとどうも辻褃があわない。アラナがエヴァンに、彼がギブスをした時期（9月）とふたりが木登りをした時期（5月末か6月始め）が食い違っていると疑問をぶつける。自分は皆に嘘をついたのかと不安になるアラナに、エヴァンは1通の手紙を見せた。彼は、ふたりの友情が確かなものであったことを示したかったのだ。ところが、プロジェクトの資金集めに行き詰まるアラナは、ソーシャルメディア上で手紙を公開してしまう。エヴァンは、手紙の削除を求めるが、情報は削除されたにもかかわらず一気に拡散し、もう誰にも止めることはできない。さらには、ひとびとは、息子の遺書を公開する家族に対して態度を変え、電話やソーシャルメディア上ではたくさん誹謗中傷が家族に寄せられる。

混乱した事態のなかで、エヴァンは、あの手紙は、自分が書いた手紙であったことをコナーの家族に打ちあける。そして、エヴァンは、母親（ハイディ Heidi）にだけ、州立公園の木から落ちた日のほんとうのことを初めて話す。「あの夏、何も食べられないし薬を飲んでも眠れない。どうしようもなかった。死にたかった。」今ここに、あの時

と同じく、涙を流し人には見られたくないようなひどい心の状態のエヴァンがいた。エヴァンは、ソーシャルメディア上で多くのひとに嘘をついたことを心から謝る。その後、学校では、友人たちはほんとうのことを知り、エヴァンと懇意にするひとはほとんどいなくなった。コナーの家族もエヴァンと疎遠になった。けれども、エヴァンは、コナーという人物を知るべく彼の愛読書を読み、チャットを通して彼の知りあひからの聴き取りを続ける。

1年後、エヴァンは、再園されたりんご果樹園でゾーイと再会する。そこで話をする。エヴァンは、コナーが弾き語りをする映像を見つけ、コナーの家族やアラナ、ジャレッドに送っていたのだ。その動画のなかで、荒々しく乱暴なコナーが穏やかにギターを弾き歌っていた。果樹園でゾーイは、かつては恋仲だったエヴァンに、今初めて出会っていたらよかったのにと告げるが、心のなかでは感謝していた。エヴァンが両親の力になってくれたことに。エヴァンのおかげで、家族は幾度となく果樹園にハイキングをしに訪れコナーを失った悲しみをなんとか乗り越えつつある。ゾーイは帰ったが、エヴァンはひとり果樹園にいた。心は穏やかで曇りが無い。「今日は少しだけ近くに感じる」と口ずさむ。コナーのことを思い返していた。眼前には、木々の光景が広がっていた。

【演劇での演出：ソーシャルメディア】 *Dear Evan Hansen*

演劇では、舞台の奥行きを生かして、ソーシャルメディアが演出されるところが独創的である。次のように作品は評されている。「『ディア・エヴァン・ハンセン』は「フェイク・ニュース」や「オルタナティブ・ファクト（もうひとつの事実）」、匿名で説明のつかないようなインターネット／ツイッターのおしゃべりという現在の世界がその舞台となる」（Lapine）¹¹。舞台上には無数の映像が配置され、歌の感情的な高まりに連動して映像は変わる。劇場空間の外のひとたちとのつながりが見えるようにし、同時にソーシャルメディア上のひとのつぶやきを音で表す¹²。プロジェクト・デザイン担当のピーター・ニグリーニ（Peter Nigrini）によると、プロジェクト・デザインの主要な部分は、ソーシャルメディアからの画像の断片を使用していると言う¹³。それらは、ひとびとがいかに情報を示すことを望んでいるかのメタファーであるとされる。

2. 演劇の映画化にともなう差異

“For Forever”という曲がある¹⁴。エヴァンが歌うナンバーである。「僕らの目に見えるのは永遠に空だけ／僕らは永遠に世界が過ぎゆくままにする／僕らは永遠に続くかのように感じる／こんなふうな／（中略）／友人とふたりだけ／真の友人／申し分ない1日（“All we see is sky for forever / We let the world pass by for forever / Feels like

we could go on for forever / This way /... / Two friends / True friends / On a perfect day”）」この歌詞の背景にあるものを説明してゆきたい。

映画では、映像の構成が複雑で、観客にとって理解が難しいと考えられる場面がいくつかある。監督は、映像のなかに人物の憧れや孤独を視覚化しようとする。複雑なのは、過去のフラッシュバック（現実）と人物が思い描く世界（非現実）が混じるからである。歌は劇の独白（Soliloquy）に通じる効果があり、映画は、映像の強みを活かしてひとりの人間の内省を視覚化する。

スティーヴン・チョボスキー監督は、曲“For Forever”を通して、エヴァンという人物を次のように解釈する。「人にはユーモアと悲しみが共存している。両方の側面を示している。エヴァンはひどい嘘つきであるが、またとても孤独な思いやりのある若者だ。だから成立するんだと思う」¹⁵。監督は、青年が嘘をついている根底に孤独があり、相手の悲しみを理解しようとする思いやりがあると見ている。映画は、そういった解釈にもとづいて人物を描いている。

ミュージカルが映画に作り変えられる時、ミュージカルではうまくいっても映画ではそうはいかないことがある。本劇でトニー賞（主演男優賞）に輝いた俳優ベン・ブラット自身もその難しさを認める。「（映画化の話を）引き受けるのはとても怖かった。映画のアダプテーションという点では、ひとびとが舞台上で観て聞いたことを伝えたいと思い、個人的に重圧を感じた。けれども、また全く新しいプロジェクトとして取り掛かった。なぜなら、映画にするとという性格上、それは全く異なる仕事であり、舞台上では乗り切ることができるけれど、映画では乗り切れないようなことが多くあるからである。その反対もある。」¹⁶ そうした考えのもと、ベン・ブラットは、映画では舞台とは異なる演技方を心掛けている。ステージでは観客を前に声を張って歌うが、撮影ではミュージカル特有の不自然さを緩和させる。例えば、“For Forever”の出だしでは、コナーの家で、ベンが初夏の田舎道での記憶をささやくような話し方から歌に切り替わる。映画撮影で、ベンがステージ・パフォーマンスの良さを活かしているのは、どのテイクが最後のテイクなのかを知った上で、多くの公演を通して歌い続けてきたナンバーに別れを告げるつもりで最後のテイクに臨んだ点であろう。映画での彼の最終テイクは舞台的な発想で1回限りのパフォーマンスなのである。

映像は様々なカットによって、エヴァンの孤独を切り取る。彼は、部屋から通りの往来を眺めている（曲目“Waving Through a Window”）。ダニエル・ピノ（Daniel Pino ラリー役）は、映画のなかに「ひとびとに見られていないというテーマ、窓越しに手を振るがいつも取り残されている

ように感じるというテーマ」があると言う¹⁷。そこに若いひとが理解する社会的共鳴があるのではと指摘する。一方で、エイミー・アダムス（Amy Adams シンシア役）は、外側に立って覗き込むイメージは誰もが理解できると語る。窓を通して景色を見る構図である。

ここで「見られていない」という心象は、その人のアイデンティティの危うさを示していて、孤独感を伝える点で大きい。そのひとはそこにいるが、誰にも気付かれていないという構図がある。映画のエンドロールの主題歌¹⁸（曲目“You will be found”）では、「誰もいない感覚を知っているかい？（“Have you ever felt / Like nobody was there?”）」「自分が消えてしまいそうな感覚を知っているかい？ 落ちても音すら誰にも届かない感覚を（“Have you ever felt / Like you could disappear? / Like you could fall / And no one would hear?”）」という一節がそのテーマを象徴している。映画は、エヴァンやコナーだけでなく、「匿名のひとたち（“anonymous one”）」とよばれるような「現代の若者」の向き合う孤独と不安を問題にしようとする。

エヴァンはその孤独感を別のもので埋めあわせしようとする。それが想像上のコナーである。エヴァンは木から落ちた時のことを曲のなかで回想する（曲目“Waving Through a Window”）。「森のなかで落下し／まわりに誰もいない時は／ほんとうに墜落したのか／それとも音がしたといえるのか（“When you're fallin' in a forest / and there's nobody around, / do you ever really crash / or even make a sound?”）」と自問する。自然現象として、音とは、人間のからだの器官が空気の振動を感知することによって存在する。エヴァンの歌のなかに、落ちた音は本人に認識されているが、他のひとには認識されていないから成立しないのではという懐疑がある。小さな疑問は彼のなかで膨れあがり、このフレーズは4度も繰り返され、誰かが気付いてほしいというフラストレーションは爆発する¹⁹。ここには、強烈なアイロニーがある。カメラのフレームにおいて、学校の廊下や体育館にたくさんの学生が集う。確かにエヴァンはそこにいる。だが、透明人間さながら学生たちには認識されていない。ベン・ブラットが考えるように、曲“Waving Through a Window”は「見られていないけれども見られたいと願うひとびとにとっての象徴歌（アンセム）」なのである²⁰。

エンドロールの歌（曲目“You Will Be Found”）の結末では、孤独と絶望の先に、友情と希望が提示されている。「救いに向かって／手を伸ばせるから」「そうすれば、誰かが来てくれる」と穏やかな未来が待ち受けている。このイメージは、映画では、曲“For Forever”のなかに分かりやすく具現化されている。非現実の光景として、

大きな木の根元に倒れたエヴァンに、コナーが手を差し伸べる光景が演出されている。そうして、ふたりは助け合い森を去る。つまり、この心象はエヴァンのついた嘘をもとにしている。心象は、木から落ちた時、誰かに気付いてほしかったと願うエヴァンの気持ちに呼応している。そこに、真実（木からの落下）と嘘（真の友人の存在）が混在する。こうして、映像のなかに、エヴァンが切望する、自分だけを見つけてくれる真の友人（true friend）が生み出されるのである。

僕は高いところから世界がどう見えるのか疑問に思いながら／一歩ずつ／一枝ごとに／高く高くよじ登る／太陽が顔を照らすまでよじ登る／すると突如、枝が折れるのを感じ／僕は地面にいる／腕はしびれている／あたりを見回し／彼が僕をつかまえに近づいてくのが見える／すべて大丈夫／僕らの目に見えるのは永遠に空だけ／僕らは永遠に世界が過ぎゆくままにする／僕らは永遠に続くかのように感じる／こんなふうに／（中略）／友人とふたりだけ／真の友人／申し分ない1日（“For Forever”）

映像として可視化される世界のなかに、エヴァンの憧憬が映し出されている。どこまでも続く空、ふたりだけの時間。エヴァンは太陽が顔を照らすところまで木を登ろうとしている。それは、歌詞、映像ともに、希望に溢れる青年の衝動に見える。だが、青年の真意は異なっている。この物語の終わりの方で、エヴァンは全てが悲しい作り事であったと懺悔するが、手遅れになってようやく「太陽のあたるところへどうやって踏み出すのか（“So how do I step in / Step into the sun?”）」と前向きに考え始めるからである（曲目“Words Fail”）。物語の冒頭では（曲目“Waving Through a Window”）、エヴァンは自分の気持ちを「火傷をしたように感じる時には、太陽があたるところから離れる（“If you keep gettin' burned / Step out, step outta the sun”）」と言い表していた。エヴァンは、窓から手を振っても、誰も手を振り返してくれない不条理を経験しているため「あらゆる太陽が昇るとは限らない（“every sun doesn't rise”）」と不信感を募らせている。エヴァンのなかに、ひととの関わりを避け日陰へ、さらには真実から逃げてきたという認識がある。チョボスキー監督は、改悛する青年にひとびとから許されるための「行動」を用意し、そうした筋書きをエヴァンという人物に与えることで、成長の過程を描こうとしているのである。

演劇（ミュージカル）と映画では、すこし温度差がある部分がある。それは嘘の罪にかかわる、コナーの存在の演出方法である。演劇では、コナーは時々現れ、エヴァンと

話をする。エヴァンには統合失調症の症状がありそのため幻聴（他界したコナーの声）が聞こえるのか。それとも、エヴァンの懐疑心に答える「内なる声」を、「コナーの声」として表しているのか。観客の多様な受け止め方があると考えられる。舞台上では曲“Sincerely Me”のなかで、ジャレットとエヴァンが、コナーとエヴァンが友達である証拠としてE-Mailの履歴を偽造しているのだが、コミカルで、観客席からの笑いが絶えない²¹。舞台上でPCの前で妄想するエヴァンの動きと、作り事のなかのコナーの動きがすこしずつシンクロしていくからでもある。ついにコナーはE-Mailのなかから飛び出してきて、エヴァンとジャレットと3人で踊り大騒ぎをする。

その一方で、演劇では、コナーとエヴァンの会話は、エヴァンにしか聞こえない場面が多々ある。エヴァンが誰に相談しようかと迷っていると、コナーが現れて僕に話せばいいと言う。コナーは、エヴァンと自分は、見られるのを待ち続ける負け犬だと話す（78）²²。「僕らがいることを誰も気に留めないけれど、消えるに値するするひとなどいない」とコナーはやや憤慨気味である（79）²³。エヴァンの思いも同じである。つまり、ふたりは同じ境遇にあり、孤独感や疎外感を分かちあう。当事者と観客だけに聞こえる対話を通して、コナーが、エヴァンの心のなかに存在するかのよう描写されている。とりわけティーンエイジャーらしい軽いジョークと笑いに満ちた友人同士のやり取りは、観客のなかに、エヴァンにとっての話せる友人としてのコナーの存在を無理なく構築していく。笑いにはひとを共感させる力があり、観客は三人のどこか滑稽なやり取りに魅了されていく。

一方、映画では、そういった観客と演者との相乗効果は乏しい。エヴァンの想像の「作り事」のなかでコナーはユーモラスに動き出すが、演劇ほどの笑いを誘うことはない。つまり、たくさんの対話を通して、エヴァンにはコナーとの信頼関係がある、という演劇では周知の事実が、映画では示されない。演劇の対話では、ためらうエヴァンに対して嘘をつくように後押しするのはコナーである。それに対し、映画では、コナーの声、といったエヴァンの心身のアンバランスを仄めかすものが希薄である。そのせいか、健康に見えるエヴァンは、妄想のなかで、知らないはずのコナー像をつくりあげ、利己的な理由から嘘を貫いていると観客に感じさせる可能性がある。こうしたところには、物語のほころびがみられる。孤独で思いやりのある若者という演出側のコンセプトとの隔りがある。

嘘は、青年の悲しみと深く結びついている。曲“Words Fail”では、嘘についてエヴァンは泣きながら「僕が今まで経験したことのないことの一部になれる気がした」とその理由を明らかにする（3-5. [資料1]を参照）。彼が

仄めかしているのは、子どものことを気遣える両親がそばにいる家庭である。エヴァンは離婚家庭に育ち、父親には再婚した家族がいるため、父親との交流がない。また、母親は看護師の仕事で家を空けている。そのようなエヴァンには、両親の愛を始め、願っていたもの全てが、愛するゾーイの目の前にはあるように映る。「君（ゾーイ）はそれが真実だと信じたがっていて／だから君はそれを真実にさせる／そして君はこう考える／もしかしたら 誰もがそう望んでいて必要としているかもしれないとも／ほんのすこし」と考える（曲目“Words Fail”）。エヴァンは、「誰もが」と置き換えるが、そう強く願っているのはエヴァン自身であろう。コナーとの絆を真実にすることで、木から飛び下りるような壊れた自分を見なくてすむ。現実を直視せず逃げるため「誰もがそう望んでいるかもしれない」とひとびとに思わせたのではないかと考えられる。

嘘の発覚で、観客が直面せざるを得ないのは、倫理的な問題である。特に、コナーの家族の結末である。なかでも、ゾーイは、エヴァンが家族の悲しみを和らげるために真実を話していたのではなく、内面を見つめてくれるひとがいてほしいと願って嘘をついていたのを知り、ひどく傷つくことになる。それまで、ゾーイは「壊れたものをみな思い起こさせるものなんて必要としない」とエヴァンへの愛を伝えていた（曲目“Only Us”）。彼女は、暴力を振るう兄は非道なひと（monster）だと感じている。エヴァンは彼女の気持ちに対して「僕を手放さないための1万もの理由をあげるよ」と応じていた。そこには、心の奥を見つめるのを避けながら生きてきたエヴァンにとって、自分に対する精一杯の前向きな評価がある。だが、嘘に振り回されたゾーイの前では、それもすべて虚しく映る。果たして、エヴァンは目の前にあることを真実にさせて良いのか、と多くの観客は、複雑な彼の生き方を知ってなお、倫理的な観点から嘘をどう受け止めるべきか戸惑うことになる。

周囲のひとが受けた悲痛など、嘘がもたらす残酷な側面は、この映画に関して「思いやりのある若者だから成立する」とする解釈がただそれだけでは受容されにくい部分も含んでいるのである。映画の“Words Fail”のナンバーにおいて、嘘を告白する青年の姿に観客は胸をつかれるが、演劇においても同様で、その姿はあまりにも痛ましい。それは、観客に、嘘という裏切りの大きさを痛感させるのである。

3. 嘘に対する観客反応

映画を観ている観客に右記の質問をした。予想としては、エヴァンのついた嘘を共感理解することができないひとが多いのではないかと考えられたが、[質問1]ではYes

を選んだひとが半数より多い。共感的に理解している学生が多い。

[質問1] エヴァンのついた嘘を共感理解することができますか。

[質問2] あなたは、嘘をついたエヴァンの行為を理解することができますか。（「その理由」について自由記述有。）

3-1. 調査

対象：必修外国語科目の受講生（広島工業大学1-4年生）。本映画を視聴。[1] キャリア英語A（3クラス）、[2] ETC A（1クラス）。

選択記述調査の回答数：計149人

- [1] 環境土木工学科、建築工学科、電子情報工学科、電気システム工学科、情報工学科、情報コミュニケーション学科、知的情報システム学科
- [2] 建築デザイン学科、地球環境学科

時期：2022年前期

方法：質問紙調査による。Moodle 選択記述と自由記述式の併用による。

- ・選択記述調査は1回実施。上記の項目。
- ・自由記述調査は、上記項目調査を除いては3回実施。映画についてキーワードをあげ、その理由を記させた。できる限り多くの声を収集した。

3-2. 全体の結果 [選択記述]

回答：149人

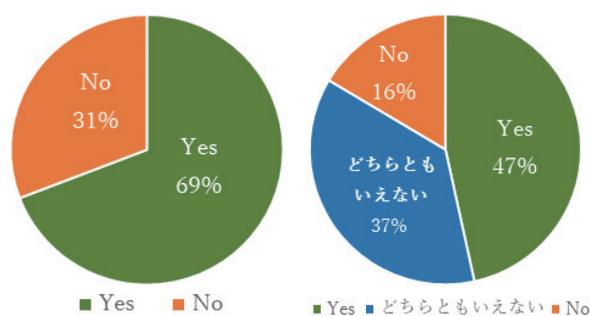


図1 [質問1]

図2 [質問2]

[図1]：[質問1]では、69%のひとが共感理解することができると回答した。2/3以上のひとが理解を示した。このなかで、[質問2] Noを選んだ人は6%である（6人/101人中）。これらのひとたちは、嘘による罪悪感、失われる信頼関係、嘘の必要性を理解できないこと、嘘によって追い込まれることを問題視していた。

[図2]：[質問2]嘘をついたエヴァンの行為を理解することができますか。Yesは、47%で、Noが16%であった。エヴァンが嘘をついた背景やそのような行為にいたった理由を理解し人物の行動を寛容に受け入れているひとが

多い (Yes 47%)。次に多いのが「どちらともいえない」で、これも37%と多い。それに対して、嘘の行為に対して受け入れがたいという反応を示すひとは16%である。

3-3. 結果とその分析 [自由記述]

[質問2] でYesを選んだひとは、エヴァンの行動を理解を示している。エヴァンが、手紙をコナーの遺書だと考えた家族の見立てを否定することは、遺族を深く悲しませることになる。そのためエヴァンが否定できなかった点に対して観客は理解を示していると考えられる。嘘をついたエヴァンの行いを擁護するものである。観客の記述では「優しい嘘」「思いやりの嘘」という言葉が多く使われていた。それは、真実を明かさない方が良いという判断にも基づいていた。その一方で、エヴァンのついた嘘を周囲が拡大解釈したことに問題があるとみなすひともいた。

また、社交不安障害に悩むエヴァンが、コナーのことを友人であると認めたことで、行動を起こすにつれて社会的になり、明るく前向きになっていったこと、さらには、それに伴ってコナーの家族が励まされていた点を良いこととして捉えるひとびとがいた。それに対して、Noを選んだひとの見方に顕著だったのは、どのような理由であれ、嘘は良くないとする見方を始め、ひとつの嘘によって自らが後戻りできなくなること、嘘が自らの利己的な理由によっていること、ついた嘘に関して、家族や周りの人に真実を話す機会があったにもかかわらず打ち明けなかったこと、始めは小さな嘘であったがソーシャルメディア上で公開される事態にまで発展してしまったこと、嘘がそれまでのひととの信頼関係を壊し、かえって自分を苦しめることになることを指摘するものであった。

「どちらともいえない」を選んだひとでは、エヴァンがコナーの家族を悲しませたくないという動機から嘘をついたことには一定の理解を示すが、その結果、壊れたものの大きさや傷ついたひとの多さや傷の深さを考えると、嘘をつくことが良いことなのかは判断できないというものだった。さらには、嘘をついたことで起こりうる事態を慎重に考えるべきだという指摘も見られた。

3-4. 作品受容と観客反応

映画を観始めた当初は、本映画に対して違和感を覚えるひとがかなりいた。ひとつには、人物が突然歌いだすというミュージカルの形式に慣れないところが関係していた。最後までその形式に慣れることができなかったひともいたが、演劇の形式について説明を加えると、物語が進むにつれてやや変化が見られた。もうひとつには、嘘をつくという行動を不安視するひとが多かった。特に、嘘をつくことが良い結果にならないことを知りながら、嘘を貫く人物を

見続けることへの抵抗感が大きかった。問題の多い主人公に対する嫌悪感も根強かった。それらは作品受容における障壁となっていた。

こうした違和感は、映画を観終わった後に、変化するように見える。例えば、映画をすべて観終わった後のコメントから「よかった」「おもしろい」「すごい」「感動した」という言葉をひろっていくと、視聴したひと全体の約40%にあたる。こうしたひとたちは、本映画を観終わって好意的な印象を抱いている。それに対して、違和感を抱くひとは約4%である。その数は当初より減っていることに着目したい。2番目に多かったのは、様々なことを映画から考えたという声だった(前述の40%を除く)。そこで言及された項目は多岐に渡る。それらをひとつに分類するのは的確ではないかもしれないが、38%に近い。エヴァンや彼を取り巻く人間ドラマから教訓を得たひとがおおかたであった。

好意的な印象が多い背景には、物語が転機を迎える部分の理解が関係している。観客のコメントを考察すると、その部分は観客の最終的な映画の受容を左右していると思われる。主な部分は以下の通りである。(1) それまでの嘘を告白したエヴァンに対して母親が言った言葉、(2) エヴァンが真実を話し、自信を持って自分の人生を歩み始めるようになるという展開である。

(1) に関して、エヴァンが、学校の友人を始め多くのひとに偽っていたことを、母親に打ち明けるシーンがある。

EVAN. The tree. I didn't fall. I let go.

HEIDI. Oh, Evan.

EVAN. Do you hate me now? You should. You should.

If you knew who I am, just how, just broken I am.

HEIDI. I already know you. And I love you.²⁴

ハイディは、エヴァンの夏の状態を知っている。しかし、あの時エヴァンが孤独から死にたいとまで思いつめていたことを、この時初めて知る。彼女は、息子が高い木の上で自らの意志で手を放して地面に落下したことにショックを隠せない。ハイディは、息子がどんなにうちひしがれた様子であれ、息子を愛しており、離れていかないと伝える。このやりとりを通して、障害・病のあるエヴァンに寄り添おうとする、家族のあたたかさに心打たれたひとは多かった。特に、この場面は、映画を通して、嘘が真実へと変わる転機である。以前はひとと交わらず自分を見せることなく生きていた主人公がほんとうの自分を模索し始める転機となっている。エヴァンは、この時から、コナーという人間を知るため、彼の愛読書や好きだった音楽、薬物依

存の回復支援施設（サニー・グレン Sunny Glen）での彼の様子を知るひとの記憶を辿り始める。物語が嘘から真実へと向かう過程で、家族が、苦しむエヴァンのそばにいて成長を見守ろうとするあたたかさが描かれている点は、観客の作品受容に変化を与えている。

(2) に関しては、嘘についてあらためて考えさせられたひとが多かった。初対面のひとと話ができない内向的な主人公に対して人間らしさを感じるひとや、自分との共通点を見出すひとが多かった。主人公はひととの関わり方や考え方が少しずつ変わっていき精神的に回復し、地域社会や友人との関わりをなかで成長する。死にたかった自分が、ようやく日々何も無いことに満足を覚え、自らの存在意義に気付くようになる。そうした物語の展開に救いを見出しているひとが多い。自信が持てなかったエヴァンが日増しに自立していく様子に、観客が心打たれる様子が顕著だった。近年のミュージカルには、2009年の『ネクスト・トゥ・ノーマル』(Next to Normal) (双極性障害のダイアナが主人公) が登場するまであまり見られなかった、障害のあるマイノリティが主人公となり、そういった人物の生き様に若い世代が影響を受けるといった構図がある。1980年代、90年代にマイノリティとしての HIV 陽性の男性に焦点があたることはあったが、障害・病のある若者が主人公となるミュージカルとしては、2016年まで『ディア・エヴァン・ハンセン』ほどのヒット作品は珍しかった。

3-5. 嘘に対する観客反応

多くの観客のなかに、嘘は良くないとする見方がある。そのような価値観に基づいて、次のような反応があることが窺える。嘘が発覚した時に取り返しのつかないことになる事態を懸念するものである。それだけでなく本人が罪悪感に苛まれるであろうことを予想している。ことさら、エヴァンが孤独な悩みを隠し真実を打ちあけられない様子を目にするのがつらいと感じる観客である。

それに対して、もうひとつの反応としては、相手を思っただけの嘘は悪いことではないと考える観客の反応がある。多くの観客が、この映画を観る過程で、キーワードとして「優しい嘘」、「思いやりの嘘」といった共感的な言葉を挙げていたことにもそれは顕著である。嘘をつく行為の良し悪しは、嘘の種類によるとみなす見方である。観客が考える「優しい嘘」とは、エヴァンが、悲しみに暮れているコナーの家族をこれ以上悲しませないように、コナーの家族に辻褃を合わせたものである。多くの観客の見方では、エヴァンが能動的についた嘘ではなく、コナーの家族に明かせなかった類の事柄として解釈されている。エヴァンは、シンシアの信じる息子の姿を否定できない。こうした部分をもたらす結果は、ある意味、残酷である。追悼プ

ロジェクトが大きくなるにつれ、エヴァンは学校のトイレで吐くなど社交不安障害の症状が顕著になる。ついた嘘の内容を簡単には取り消せない状況に追い込まれていたのである。エヴァンがついた善意の嘘は、物語後半、ソーシャルメディア上で真実として公開され、悲劇へと転じる。彼の意に反して情報は急速に拡散する。

物語を観終わった観客は、悪意でなく思いやりのある嘘、ひとを幸せにしようとする行為に一定の理解を示すのである。その過程では、エヴァンの障害との闘いや、自死したコナーの家族との関係性、母親が仕事で不在がちであること、さらには離婚家庭に育ち両親の愛情に飢えていたという生育環境など、人物についての理解が進んだことが作用している。3章4節(1)(2)のように、物語における救いを見出すことができるという点で、好意的な評価につながりやすかったことが考えられる。

嘘に関して、観客のコメントから考察したい点がある。そのひとつは、優しい嘘は果たして許されるのか、それとも許されないのかという議論である。物語における嘘の理由については[資料1]を参照されたい。エヴァンは歌のなかでその理由を語っている。

[資料1] 嘘の理由

“Words Fail” [歌詞]

(*ブロードウェイ版の歌詞による。翻訳は、筆者による。)

こんなふうにならなかつた こんなふうになるとは思わなかつた 僕はここに立っていただけ ごめんさい 言うべきことを探している 話すべきこと	だから君はそれを真実にさせる そして 君はこう考える もしかしたら誰もがそう望んでいて 必要としているかもしれないとも ほんのすこし
言葉が 見つからない 言葉が 見つからない なんて言えるのか	これは悲しい作り事だった ほんとうのことじゃなかつたって わかつてる だけど僕は幸せだった 頭から消すことはできなかったと思う あきらめることはできなかったと思う 信じたかった なぜって 信じるなら 本物にあることを見なくてすむから
たぶんこう 僕が今まで経験したことのないことの一部になれる気がした どういわけ僕の良い部分を見てくれる申し分のない女の子 そんな子がいたことはなかつた	いや むしろ 壊れた資質よりも もっとましな資質であるふりをしたかった 僕はどうしようもないやつではないふりをしたかった なぜなら それを見なくてすむから 誰もそれを見るようにならないから 実際は誰も見ることができない
古臭い隠微に 野球のグローブも 僕は それを押し付ける父親なんていたことがなかつた ただそこにいる母親も だって母親はそうあらなければならぬ全てもなかつたから	なぜなら プレーキを思い切り踏むのを学んだから 鍵すらまわす前に 過ちを犯す前に 僕の最悪な部分に先導する前に 僕の最悪な部分は一見に見えない
ふざけい言いなさな わかっている 何もない 僕がやったことは意味をなすことなど何もない	なぜなら みが目にしたら どうなるだろう 彼らが目にしたら どうなるだろう 目にしたものを好きになつてくれるのか でなければ 彼らはそれも嫌うのか 僕は 真実からただ逃げ続けるのか
このことを除いては 君は時々 僕がほしかったものを目にし 君は時々 僕がずっとほしいと願っていたもの すべてを目にする それはすぐそこにある すぐそこに 君の前に	僕が今までやってきたことの全ては 逃げること じゃあどうやって踏み出すのか 太陽に向かって1歩を? 太陽に向かって1歩を
そして 君はそれが真実だと信じたがり	

まず、多くの観客が考えていることだが、エヴァンは始め、ひとを傷つけるために嘘をついたのではなく、ひとを喜ばせるために嘘をついたことである。そのうえで、3章2節[質問2]における、エヴァンの行為を理解できる(47%)、どちらともいえない(37%)という結果があっ

た。特に前者（47%）に関しては、嘘をついたエヴァンに対する観客の受け止め方は、「孤独な思いやりのある若者だから成立する」とみなすチョボスキー監督の解釈と見事に一致している。また後者（37%）に関しては、「優しい嘘」が生まれる状況には理解を示すひとが多い。2章で指摘した物語のほころびにもかかわらず、多くの観客に演出側のコンセプトが伝わっていることになる。

観客の言葉によると、嘘は良くないが、何もかも正直に話さない方が良い時もあり、「相手を思ってついた嘘は悪いことでない」とする見方がある。また、「優しい心があって（中略）嘘をついたのは理解できなくもない」と言う。嘘には必ず悪い側面がある。嘘をついた当人は罪悪感に苛まれ、真実を打ち明ける際には、多くのひとを傷つける。その一方で、観客は、善意の嘘による良い側面にも留意する。「エヴァンの思いやりによってコナーの両親、ゾーイまでもが最後は救われたのではないか」と捉えるのである。「嘘をつくこと自体（は）良くない行いだが、エヴァンはそれによって多くのことを学び、ひとびとと触れ合うことで成長していったのではないか」と考える観客がいた。

鋭い指摘である。エヴァンは、鬱や人前で陥るパニックの症状を抑えるために、薬を処方されている。初対面のひとと話す際、手は汗でびしょりになる。映像を観察すると、ベン・ブラットは視線をそらせ、話し声がか細くなり、また興奮すると自らの主張だけを大きな声でまくしたてる症状を意識して演じている。エヴァンは、コナーの追悼集会にて、大勢の聴衆を前に、無二の友人と過ごす時間のかけがえのなさについてスピーチをする。神経質なエヴァンが、いつしかコナーの両親とゾーイの家では穏やかな気持ちでたあいな話をする自分に気が付く。そこでは、以前とは著しく異なる変化が窺えると思う。彼は自分の部屋から出て、コミュニティやひととつながろうとして成長していくのである。その一方で、皮肉なことに、嘘はまた、エヴァンの願望を映し出すものである。確かな友情が存在し、ありがたい自分がそこにいるのも、嘘のおかげである。エヴァンを愛情で包んでくれるラリーとシンシア、どういうわけか良いところを見してくれるガール・フレンド（ゾーイ）、鬱病に理解のある同級生などの存在がある。エヴァンが、コナーとの絆を認めなかったら、広がらなかった交流である。観客は、相手のためについた嘘が、思わぬ余波を生み出したことに驚きつつ、エヴァンの真摯な思いが、周囲のひとにとって、さらにはエヴァン自身にとっても、良い結果につながったことに意味を見出そうとしていることが窺える。

3-6. 物語に対する洞察力

嘘に関連してさらに考えたいのは、観客の人物に対する洞察力である。エヴァンについて様々な受け止め方があった。嘘によってもたらされた思わぬ結果に対して、観客のなかに確かに戸惑いはある。例えば、「コナーの自死というネガティブな出来事がきっかけで周りの人間がポジティブになるという展開には違和感がある」という声も聞かれた。

罪を告白した後、エヴァンが失ったものを乗り越えていくに成長していくのかの解釈のひとつの鍵となるのは、「今日は／遠かった場所が少しだけ近くに感じる（“Today, today / What felt so far away feels a little closer” “Today, today, today, it feels a little closer”）」という歌詞であろう（曲目“A Little Closer”）²⁵。この一節は、映画のなかで、ギターを愛するコナーが作った曲のフレーズである。エヴァンは、回復支援施設でのコナーを知るひとから、コナーが弾き語りをした映像を入手する。かつてコナーが歌っていたメロディーを、物語の最後でエヴァンは口ずさむ。“A Little Closer”は演劇にはなく、映画化で加えられた曲のひとつである。

この曲の歌詞の象徴性に注目したひとが複数いた。ある観客は次のように解釈する。エヴァンが嘘をついていた時はコナーという人間が遠くに感じられるが、嘘を打ち明け周囲から孤立してしまった今の方が、コナーという人物の存在が近くに感じられる、という意味であろうと解釈している。また、この歌詞を歌う人物によって、観客には、歌詞の意味が違って感じられるという指摘もあった。つまり、コナーが歌う音楽では、その歌詞はコナーが理解者を求める「希望」のように聞こえ、エヴァンが歌う音楽では、コナーに対する「理解が深まり歩み寄れた」という意味に感じられたと言う。

物語のなかでコナーとエヴァンは対照的である。コナーはヒステリックで、投げやりで、時に力で友人を威嚇する。エヴァンは初対面のひととのコミュニケーションが不得手で、穏やかで内向的である。正反対であるが、ふたりに共通しているところがある。それは、他人にどのように見られているかを過剰なまでに気にして、そのせいで心のバランスが崩れたり対人関係が円滑に進まない点である。鬱に悩まされ、孤独のなかで、ほんとうは自分の価値を理解し認めてくれるただひとりの友人を求めている。悲しいことに、そのような友人に出遭えないでいる。

小説では、前述の部分は、次のように記されている。エヴァンの語りによる。

僕はかつてコナーのことを知っていたというふりをいまはしていないが、コナーはいつも僕と一緒にい

た。

僕らはある使命を帯び、相手を邪魔しないように、木々の間を行きつ戻りつしていた。面倒なことが起きているのではない。僕らはたくさんいた、孤独な人間が。僕らはみなこのことを築く手助けをした。成長するのを見ようとするひとたち。僕らが失ったひとたち。僕らはいっしょに進む。登って、落ちて、高く舞い上がる。あらゆるものの中心にもっと近づこうとする。僕ら自身にもっと近づいて。互いに近づく。何か真実にさらに近づく。²⁶

小説のラストである。小説世界では、エヴァンの心境の変化が、前述の観客の解釈と同じように描写されているのが分かる。かつてはよく知らなかった人間が、今ではいつもそばにいて、互いに切磋琢磨しながら歩み続ける。これまでもコナーの存在はエヴァンの心の支えであったが、そうした姿は見えなくなって、心に感じられる何か確かなものへと変化を遂げる。そういった意味で、エヴァンはコナーを近くに感じる。物語の最後に、観客は、主人公の心のあり様の変化から、彼が嘘によって多くのものを失うが、複雑な経験を通して得られたものがあることに気が付くのである。それがこの作品の主題でもあり、「あなたはひとりではない (“You're not alone”)」「あなたは見つかるだろう (“You will be found”)」というミュージカルの核にある、孤独に悩む若者へのメッセージに通じている。「少しだけ近くに感じる」という音楽のフレーズを通して、映画の観客が、小説の作品に描かれている世界観²⁷に近いものを正確に受容していることには驚かされる。若い層の観客に作品の世界観が伝わっていることを知るひとつの手掛かりとなる。

なお、映画の脚色では、物語の最後、成長したエヴァンの言葉は、小説よりも力強いことを指摘しておきたい。「隠れていない。嘘をついていない。それで充分。どんなに険しくても、たとえ難しいと感じられても、今回はきつとわかる。あきらめないで。踏みとどまって、前に進むんだ。ただ進むんだ」とエヴァンは言う²⁸。エヴァンが“Today, today, today, it feels a little closer”²⁹と口ずさみながら臉を閉じると、果樹園の木々の光景が広がっている。木々の光景は、「太陽のあたるところ」であり、エヴァンの心にあるオアシスを象徴している。そうした心の豊かさ、主人公の成長を見せて映画は終わっている。エヴァンが、コナーの歩みを辿る映画後半の物語は、演劇ではなく映画だけのオリジナルである。監督が、映画を通して、エヴァンが太陽のあたるところへと出ていく、成長の歩みを示したかったことが窺えるであろう。

結論

本稿では、嘘に対する観客の意識を通して『ディア・エヴァン・ハンセン』の作品受容を考察した。映画を観ている大学生の観客では、エヴァンのついた嘘に対して、高い割合で共感理解がなされている。それは、観客が寛容さをもって嘘を「優しい嘘」であると捉えていることにも窺える。多くの観客が、嘘をついたエヴァン、ある日消えても誰にも気づかれない彼の存在を、自分自身に置き換えて他人ごとではないと考えていた。寛容さは、観客のなかにあるそうした意識と結びついている。

映画を通して、観客は、嘘が誰のための嘘なのかを反芻する。嘘をつく行為は良いのか悪いのか、なかなか答えが出せない。観客が迷い考えるなかで、エヴァンのような若者に気付いてあげたい、せめて声をかけられたらと感じ始めるという変化がみられたことは印象的だった。嘘をつく青年を通して、観客がその背景にある矛盾を知り、彼らのできることを模索し始めるところに、本作品の底力を感じた。演劇の『ディア・エヴァン・ハンセン』は、2016年5月からの制作段階で、ワークショップを通してニューヨークの観客の反応や声をベースに改良されている。家族の離婚による孤独、さらには鬱病や社交不安障害に悩むティーンエイジャーがたくさんいて、そうしたひとびとに、エヴァン役俳優の人生こそがエヴァンの人生であると思わせるような力が作品にはある。

とりわけ本作品で扱われる多様な問題は若いひとの心の琴線に触れるものが多い。嘘をついた代償、ソーシャルメディアによる情報拡散の速さ、嘘によってそれまでの人間関係が崩れたことに、観客は危機感を覚え教訓を得ている。映画のなかに物語のほころびは見られるにもかかわらず、ことさら、嘘を告白しその罪を償おうとする若者の心の成長を目にすることができる点は、作品に対する最終的な満足感につながっている。

本研究を進めるなかで難しさもあった。映画を楽しむ観客がいる一方で、映画の嘘の扱いに嫌悪感を抱く観客もいる。観たくないものを強いることのないように配慮したつもりだが、一斉授業のなかで映画を教材として扱う際にどのように配慮するのかについては難しさを感じた。なお、作品には自死が含まれるため、観客の反応を慎重に観察し耳を傾けるようにした。また、障害のあるひとにとって、映画が精神的な重荷にならないように、視聴時に十分な配慮をする必要性も感じた。最後に記しておく。

謝辞

本稿は、2022年度広島工業大学外国語科目での実践をもとに観客の芸術作品受容と嘘に対する意識について考察を

まとめたものである。本研究を行うにあたり、映画について熱心に考察をまとめ、貴重な声を聞かせてくれた学生に感謝したい。

注

¹ 平成27年版情報通信白書：第2部第4章第2節「ソーシャルメディアの普及がもたらす変化」（出典：総務省「社会課題解決のための新たなICTサービス・技術への人々の意識に関する調査研究」2015, p.210）。

² 事件は7月8日11時31分に起き、リツイートのピークは、11時台と18時台であった。「『凶行』拡散 瞬時に一SNSに大量の現場映像」日本経済新聞、2022年7月9日。

³ 最終公演は2017年11月19日。

⁴ 舞台上のモニターやスクリーンで様々な映像が切り替わり、光の明滅が起きる。舞台美術、小道具の配置については、以下の映像を参照されたい。“Show Clips: DEAR EVAN HANSEN starring Ben Platt”, *Broadwaycom*, 3 Dec. 2016. 10 Oct. 2022,

<https://www.youtube.com/watch?v=jEmPrKxN3vk>.

⁵ 監督：スティーヴン・チョボスキー、脚本：スティーヴン・レヴェンソン。映画『ディア・エヴァン・ハンセン』（2021）（作曲・作詞：ベンジ・パセック、ジャスティン・ポール、制作：マーク・プラット、アダム・シーゲル、出演：ベン・プラット、ケイリントン・デヴァー、コルトン・ライアン）。Stephen Chbosky, dir., *Dear Evan Hansen*, Screenplay by Steven Levenson. DVD. Universal Pictures (2021), NBC Universal Entertainment (2022).

⁶ Jameson Rich, “Good Cry: Does It Matter Why, Exactly, a Movie Scene Becomes Ironic?”, *New York Times Magazine*, 17 Oct. 2021, 13-16. p.15.

⁷ Matthew Auvil, “Dear Evan Hansen: Words Fail”, *UWIRE Text*. 17 Nov. 2021. p. 1. この映画に対する評価は芳しくない。2021年のワースト映画としてエヴァンは“most unfortunate teen”にあげられた。以下を参照。“The Year’s WORST”, *Entertainment Weekly* 1623/1624, Jan. 2022. p.93.

⁸ Val Emmich, *Dear Evan Hansen: The Novel*. Penguin Books, 2018. 2021.

⁹ ベン・プラット主演のブロードウェイ・ミュージカル版のサウンドトラックは以下を参照。*Dear Evan Hansen: Original Broadway Cast Recording*. By Original Broadcast of *Dear Evan Hansen*. CD. Atlantic. 2017.

¹⁰ アメリカのテレビ・ドラマ『グレイズ・アナトミー』には、退院したらブロードウェイで『ディア・エヴァン・ハンセン』を観劇するのを楽しみにする重い病の少女が出てくる。人気ドラマでこのミュージカルに傾倒する若者が描

かれることは十代の若者への反響の大きさを物語っている。

¹¹ James Lapine, Foreword. *Dear Evan Hansen: The Novel*. p.13.

¹² 注4を参照。

¹³ “Focus on Projection: Peter Nigrini”, *Dear Evan Hansen: Study Guide*. By Rachel Weinstein and Caitlin Clements. p.14.

¹⁴ 歌詞はすべてブロードウェイ・ミュージカル版のサウンドトラック（2017）による。以下、歌詞の訳はすべて筆者による。本稿で引用された歌詞はすべて上記による。

¹⁵ Interview in *Evan* (2022). DVD. 翻訳は筆者による。

¹⁶ Interview in *Evan*. DVD.

¹⁷ Interview in *Evan*. DVD.

¹⁸ このエンディング曲はリン＝マニエル・ミランダが歌っている。ベン・プラットとリン＝マニエルは、2018年3月4日ワシントンD.C.にて、銃での暴力による犠牲者、孤独に苦しむ子ども・学生をなくすための“March for Our Lives (MFOL)”に参加した。そのなかで歌“Found/Tonight”（『ディア・エヴァン・ハンセン』から“You Will Be Found”と『ハミルトン』から“The Story of Tonight”のコラボレーション曲）のデュエットをしている。MFOLは、マージョリー・ストーンマン・ダグラス・ハイスクール銃撃事件（2018年2月14日）の後、学生が発起人となり呼びかけられた、銃規制を支持する集会である。3月4日の集会には数十万人が参加したとされる。前述の事件では19歳の男性が学校でライフル銃を撃ち17人を殺害した。犯人には鬱病の病歴があり幻聴があったと言われる。事件後、フロリダ州ではマージョリー・ストーンマン・ダグラス・ハイスクール公安法により、銃の購入可能年齢が18歳から21歳に引き上げられ、精神疾患対策予算の増強などが行われた。“Found/Tonight”のパフォーマンスは以下を参照されたい。“Lin-Manuel Miranda & Ben Platt ‘Found/Tonight’ #MarchForOurLives Performance”, *Atlantic Records*, 27 Mar. 2018. 10 Oct. 2022,

https://www.youtube.com/watch?v=wzE_HCK_gVo.

¹⁹ 下記の番組の動画で、ブロードウェイ・ミュージカル版の“Waving Through a Window”の演出の一部を視聴することができる。2016年11月NBCの番組“Late Night”出演のベン・プラットによる。“Dear Evan Hansen: ‘Waving Through a Window’”, 23 Nov. 2016. 1 Sep. 2022,

https://www.youtube.com/watch?v=x_CNqKA2t9M.

²⁰ Interview in *Evan* (2022), DVD.

²¹ 演劇『ディア・エヴァン・ハンセン』は孤独、自死、病、障害など比較的重いテーマを扱うにもかかわらず、たくさん笑いの笑いがある。演出では若者のユーモアが意識され

ているが、アップテンポのポップな音楽や軽快なダンスなどにも若者の趣向が取り入れられている。

²² Steven Levenson, *Dear Evan Hansen*. Music and Lyrics By Benj Pasek and Justin Paul. Theatre Communications Group, 2017. pp.78-79. 演劇脚本である。

²³ Levenson, p.79.

²⁴ 映画の台詞による。: *Evan* (2022). DVD.

²⁵ この曲の歌詞は映画によった。: *Evan* (2022). DVD.

²⁶ 訳は筆者による。Emmich, *Evan: Novel*. pp.356-57.

²⁷ 演劇（ミュージカル）は、スティーヴン・レヴェンソンの脚本をもとにしている。

²⁸ 映画の台詞による。訳は筆者による。: *Evan* (2022). DVD.

²⁹ *Evan* (2022). DVD.